



|              |                                                                                     |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------|
| Title        | 2020 年度 大阪大学地域研究フォーラム（OUFAS）例会における発表要旨                                              |
| Author(s)    |                                                                                     |
| Citation     | アジア太平洋論叢. 2021, 23, p. 111-119                                                      |
| Version Type | VoR                                                                                 |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/95070">https://hdl.handle.net/11094/95070</a> |
| rights       |                                                                                     |
| Note         |                                                                                     |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 2020 年度 大阪大学地域研究フォーラム (OUFAS) 例会における発表要旨

アジア太平洋論叢では、今後、大阪大学を拠点に活動する地域研究に関わるグループとの連携を進めようと考えています。大阪大学地域研究フォーラムは、言語文化研究科言語社会専攻の教員を中心に、2014 年 7 月に創設されたアジア勉強会を前身としています。2016 年 10 月、この名称への改称とともに、大学院で合同ゼミを併設して一体で運営を行なってきました。ここに大阪大学地域研究フォーラムの 2020 年度例会での発表者、タイトル、要旨を掲載いたします。

### 第 103 回例会

■日時 5 月 28 日 (木) (16:20~)

■発表者 杉本悠貴 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士前期課程 1 年)

■発表タイトル タイ王国における女性王族の王位継承権研究——1974 年憲法の制定過程に着目して

■要約 タイにおいて、女王は歴史上存在せず、近現代以降も王室典範によって女性王族の王位継承権は否定されてきた。しかし、1974 年の憲法改正によって、女性王族の王位継承を可能とするような条文が追加された。この改正は、西洋のそれに先じるものであったが、条文に不明瞭な点が存在するのに加えて、王室典範の条文も女性王族の王位継承を依然否定したままである。これらの点を明らかにすべく、本発表では、1974 年憲法が制定された当時の国会議事録等を通じて、その憲法の改正が行われた経緯を検証、考察する。

### 第 104 回例会

■日時 6 月 4 日 (木) (16:50~)

■発表者 Ng Richard Wing To (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程 1 年)

■発表タイトル 夢の途中と交錯——梁啓超とファン・ボー・チャウのユートピア小説

■要約 本報告では、ユートピア思想と現実認識がどのように相互作用して文学的磁場を作り上げたのかという点について、梁啓超 (1873-1929) とファン・ボー・チャウ (潘佩珠、1867-1940) という日本に寄寓した中国人とベトナム人の作品を比較し、その想像力が持つ意味について考えたい。

近代アジアにおけるユートピア文学に関連する研究は主として、一般の近代文学研究のように、西洋知識がどのようにして異なる地域に伝播し、新たな近代文学の内容と形式をもたらしたのかに注目してきた。しかし、近代文学の広がりや伝播はそれ自体で文化的な越境と変容 (transculturation) の実践であるとすれば、西洋文学の影響と需要は、相互に関連した実在の人物が文化ヘゲモニーを形成し、またはそれに対抗して、多角的に展開していたということになる。このような重層的な文学空間の中で、個々の作家は様々な手法で創作的な理念やアイデンティティの交流を行っていたのである。ゆえに、アジアにおける近代文学の実践ないし個々の作家のアイデンティティの軌跡は、社会政治的・言語的条件の変化という多様な文脈の中で、文化ヘゲモニーの異なる組み合わせによる文化的な越境と変容のプロセスであり、「東西」という二分法では、その文学現象を還元することはできない。

本報告は梁啓超の日本亡命、ファン・ボー・チャウの日本留学、そして彼らの日本における交流に着目して、両者のユートピアにたいする想像力の形成を明らかにする。そこで「私たちがユ

ートピア〉そのものの想像を構造的にできなくなっていることを、局所的かつ明確に、豊富な具体的な詳細とともに理解させること」といったフレドリック・ジェイムソンが論じたユートピアのジャンルの本質と政治的な機能の視角から、梁啓超の「新中国未来記」(1902)と、ファン・ボーイ・チャウの「外国国」(1917)および「猿国」(1923-1924)という三編のユートピア小説を分析し、作品の性質を明らかにする。

## 第105回例会

■日時 6月18日(木)(16:50~)

■発表者 岡野翔太(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程3年)

■発表タイトル 戦後日本華僑研究の形成と交錯した「台湾」認識

■要約 台湾が戦前・戦後を通じて経験した複雑な歴史は、日本列島に居住する台湾ルーツの人びとを「華僑」と呼び得るか否かに少なからぬ影響をもたらしてきた。「華僑」とは、中国の領土から海外に移住した人びとの政治的アイデンティティを表す語であるが、その時々にあつて「台湾」にルーツを持つ人びとの政治的アイデンティティが「華僑」の呼称をめぐる、繊細かつ多様であつたからである。しかしながら、日本列島において「華僑」を対象とした研究をする人たちの多くは、これまで各時代で「華僑」の語が指示する意味内容やその背景を必ずしも十分に理解せず、「華僑」の語を一義的に扱いがちであつた。同様に、「台湾」という語の使用においても、その語を用いることで中華民国あるいは中華人民共和国、または台湾独立という政治的立場に立脚するのか、単に地理的概念として用いるのか様々な文脈が混在し、読み手に混乱をきたす状況を作り出した。「華僑」や「台湾」をめぐるこの混乱やゆらぎは、戦後日本の「華僑研究」に対してどのような問題を投げかけるのだろうか。戦後日本の「華僑研究」はアポリティカルに振舞おうとしながら、その都度不用意な政治性を招来してきた。本発表は日本の「華僑研究」のアポリティカルな振る舞いと、台湾出身者の描き方について考察する。そのための手掛かりとして、本発表では戦後日本において中国大陆および台湾ルーツの人びとを併せて「華僑」と呼び記述してきた研究とその流れを歴史的に追いかけてながら、「華僑」の像が、当事者・政府当局・研究者・メディア・故郷の人びととのインタラクションのなかで構築され、揺らいでいく様子について紹介する。

## 第106回例会

■日時 6月25日(木)(16:50~)

■発表者 唐振博(大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士前期課程1年)

■発表タイトル 雲南省少数民族の言語・文字に対する保護——法律の面から見る

■要約 中国の多民族的地域としての雲南省には、さまざまな少数民族の言語・文字が存在しており、言語文化の多様性が反映されている。それ自身が持つ高い価値などの理由により、少数民族の言語・文字に対する保護は長年、国に重要視されてきている。本研究は、中国の法律と雲南省の法令から、少数民族の言語・文字に対する法的保護を考察しようと試みるものである。

## 第107回例会

■日時 7月2日(木)(16:50~)

■発表者 彌吉恵子(大阪大学グローバルイニシアティブ・センター 招へい研究員)

■発表タイトル 諸言説のはざまで——イタリアの精神科医と心理士の語りを中心に

■要旨 近年、一部の精神保健従事者らの間では、近代西洋的な精神医療以外の言説をとりいれ

た治療が行われるようになっていく。これは、宗教や伝統医療の言説も、治療では有益な作用をもたらすという認識が広がりつつあるからである。例えば、米国の約 5 割の精神科医は、キリスト教徒やユダヤ教徒の患者に対して、宗教家へ相談することを促し、フランスの心理士トビ・ナタンは、伝統医療を含むあらゆる言説をとりいれる治療を提唱している。臨床家らは、患者の心の病いを複数の視座から捉えることに意義を見出しているのである。

同様の傾向が、イタリアの臨床家の間でも見受けられる。国際エクソシスト協会のスポークスマンは精神科医であり、イタリア南部の治療儀礼に関する民族誌は多くの臨床家に参考書として読まれている。ならば、昨今、アフリカや中東からの移民が急増したイタリアでは、移民の宗教や伝統医療の言説もとりいれた治療が行われているのではなかろうか。そこで本研究では、イタリアで移民の治療にあたる精神科医と心理士が、移民の出身地の宗教や伝統医療をどのようにとりいれ、治療に役立てようとしているのかを彼らの語りを通して検討した。

現地調査では、ミラノとピサ、ローマで移民に精神保健サービスを提供する臨床家計 45 名を対象にインタビューを行った。その結果、患者の伝統医療や宗教の言説が積極的に治療にとりいれられていることが分かった。臨床家たちは、複数の言説のいずれもが治療に有効に働きうるものとみなし、自分自身を「委ねる」。このとき、臨床家たちが未知の言説にたいして覚える不安感・危機感が、複数の言説を取り扱ううえでの前提となっているといえる。臨床家たちは、異質な言説の有効性を信じて自分自身を委ねる一方で、異質な言説に巻き込まれそうになる自分に危機感を覚え、そこから自身を解き放とうとするのである。このような自己撞着が生じるからこそ、臨床家らは、常にあらゆる言説に対してひらかれた態度で移民と向かい合うことができるのだと考えられる。

## 第 108 回例会

■日時 7 月 9 日 (木) (16 : 50 ~)

■発表者 青山瑞季 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士後期課程 2 年)

■発表タイトル 戦間期ハンガリーにおける、1919 年の土地改革についての記憶——ヘヴェシュ県を事例に

■要旨 発表者は博士論文で、1919 年にハンガリーで試みられた土地改革の歴史的意義を検討することを目指している。1918 年 10 月、ハンガリーではハプスブルクからの独立や国内の民主化を試みる革命が起こり、カーロイを首相とした共和制が成立した。カーロイ政権が目指した内政の諸改革の中でも、特に多くの人々に期待されていたのが、土地改革であった。歴史的に長い間、一部の貴族に大部分の農地を占有されていたハンガリーにおいて、大所有地の解体と農民への分割は、農民にとっての長年の悲願であった。更に、貴族として多くの土地を持つカーロイ自身が、この土地改革を主導したことは、貴族の土地支配が続いていたハンガリーにおいて、歴史的に重要な事であったといえる。その後共産主義革命が起こったことにより、土地改革自体は頓挫したものの、カーロイはヘヴェシュ県にある限嗣相続の一部を自ら農民に分割した。

そこで本発表では、カーロイから直接所有地を分割された農民が、その後カーロイについてどのように記憶したか検討する。カーロイ政権崩壊後の共産主義政権下でも、共産主義政権崩壊後の権威主義体制下でも、カーロイの目指した土地改革が再度試みられることはなかった。さらに権威主義体制下では、政府によってカーロイは「反逆者」として扱われ、カーロイについての肯定的な見解を述べることは難しい状況にあった。そうした状況下でもヘヴェシュ県の農民の中には、カーロイを、農民を救おうとした人物として記憶していた人々がいたことを明らかにする。

## 第 109 回例会

■日時 7 月 16 日 (木) (16:50~)

■発表者 劉雪妮 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士前期課程 1 年)

■発表タイトル 日本人の初級レベルの中国語学習者が中国人と接触する場面におけるコミュニケーション・ストラテジーの使用状況及び原因分析

■要旨 言語学習の目的はコミュニケーションであり、日本人を対象とする中国語教育では、語彙や文法は既に進んだ段階にありながら、異文化接触場面におけるコミュニケーションの面では円滑さに欠けるということが常に起こる。それは中国人が使うコミュニケーション・ストラテジーの習得が十分に考慮されておらず、コミュニケーション・ストラテジーを言語化して伝えることを行わないからである。

言語の使用は本質的にコミュニケーションストラテジーを伴っている。日本人の初級レベルの中国語学習者は中国語を使って、中国人と接触する際、無意識的にコミュニケーション・ストラテジーを使うことに気づいた。「回避方略」、「聞き返す」のような言語的なコミュニケーション・ストラテジーはもちろん、「目線」、「顔つき」、「ジェスチャー」など非言語的なコミュニケーション・ストラテジーもある。しかし、初級レベルの学習者はまだ中国人の言語心理、言語意識、思考パターンが形成されていないことから、コミュニケーション・ストラテジーの使用が母国語の日本語によるところが多いことを発見した。

従って、日本人の初級レベルの中国語学習者が中国人と接触する場面におけるコミュニケーション・ストラテジーの使用状況を調査し、主として日本人の中国語学習者に見られる中国語コミュニケーションストラテジーの失敗例を主たる研究対象として、日本人の言語意識、言語心理、行動様式や思考パターンを明らかにしようと考えている。日本人の中国語学習者に、より自然な中国語を身に付けさせることを可能にすると同時に、それは翻って、中国人が日本人らしいコミュニケーション・ストラテジーを学習するための参考となりうる。

## 第 110 回例会

■日時 7 月 30 日 (木) (16:50~)

■発表者 朴苑善 (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士前期 2 年)

■発表タイトル タイ北部チェンマイ県におけるタイヤイの「教育」を用いた生活戦略——現地調査からの考察と今後の研究の三つの軸

■要旨 タイは様々な民族が暮らす多民族国家である。その中でタイヤイとは、ミャンマー、シャン州を中心に中国雲南省西部、タイ北部に分布するタイ系民族の一集団であり、チェンマイ県に居住するミャンマーからの移民族のうち大きな割合を占めている。また、現在タイ政府は、非タイ国籍者 (外国人児童や無国籍児童、さらには身分証明書類を持たない無登録児童など) に対してもタイ人児童と同様の教育を与えることを規定している。ここから、タイヤイにとって「教育」はタイ社会に参加する際の一つの基軸として機能しているように思う。

本研究では、タイ北部チェンマイ県におけるタイヤイの中でも、タイ生まれ、あるいは幼少期に来タイした比較的若い世代のタイヤイに着目する。今回の報告では、非タイ国籍者がタイ社会で享受することのできる教育の制度について概観し、また、かれらが実際に享受してきた教育はどのようなものであったか、それらの教育が現在の暮らしや将来の進路選択を行う際にいかに作用／機能しているかについて、2020 年春に行った現地調査からの考察を報告する。そして今後の研究において着目したい三つの軸についても紹介する。

### 第 111 回例会

■日時 10月8日(木)(16:50~)

■発表者 宮原暁(大阪大学大学院言語文化研究科・教員)

■発表タイトル 小説『骨』を読む―「血」の不在について

■要旨 フェイ・ミエン・インの小説『骨』では、「書かれた正しい歴史」や「移民排斥法」から疎外された、あるいはそれらと拮抗するものとしてこれまで解釈されがちであった「中国系アメリカ人」の「家族」の歴史やアイデンティティ(「中国系アメリカ人」と呼ばざるを得ない点に問題の根幹があるのだが)を、語り手であるレイラが、いかに制御できない時間を語ることができないかということめぐって、躊躇したり、言い淀んだりしながら語って／沈黙している。これまでの華僑・華人研究やチャイニーズ・ディアスポラ研究であれば、「中国人性」の表象とアメリカ社会への同化の間で解釈されがちな諸事象(経験やそれに関する解釈)は、『骨』では「真ん中」ということの不穏さと結びあわせられ、どのようにしても正当化され得ない記憶として残される。

本報告では、小説『骨』に散りばめられたいくつかの「中国人性」の表象(と読まれがちなもの)を、「真ん中」ということと結びつけてエスノグラフィックに再解釈してみたい。

### 第 112 回例会

■日時 10月15日(木)(16:50~)

■発表者 朴苑善(大阪大学大学院言語文化研究科博士前期2年)

■発表タイトル 「タイ北部チェンマイ県におけるタイヤイ移民の主体的教育の選択 ―タイ生まれや幼少期に来タイしたタイヤイ若年層の高等教育への進学に着目して―」

■要旨 タイ国北部に居住するタイヤイ(シャン)移民のなかには、何世代も前からタイに居住しタイ国籍を有する者だけでなく、近年労働を目的に来タイした者まで幅広い背景を持つ人々が存在している。特に1990年代、ミャンマーからタイ国北部に大量に流入してきた移民には、タイヤイが大きな割合を占めている。タイ政府は近隣諸国から流入してきたタイ国籍を持たない住民の法的立場を整理するとともに、これらの非タイ国籍者の子弟(外国人児童や無国籍児童、さらには身分証明書類を持たない無登録児童など)に対してもタイ人児童と同様の教育を与える政策を打ち出している。このように、「教育」は一方では非タイ国籍者子弟への統合政策の一つであると同時に、タイヤイ移民にとってタイ社会に参加する際の一つの手段として機能していると考えられる。

本研究は、タイ北部チェンマイ県におけるタイヤイ移民の中でも、タイ生まれ、あるいは幼少期に来タイした若い世代のタイヤイ移民に着目する。特に高等教育への進学という主体的選択から、かれらにとって教育が持つ意味とは何であるかについて考察を行う。本報告は修士論文執筆に向けた最終発表である。

### 第 113 回例会

■日時 10月22日(木)(17:00~)

■発表者 彌吉恵子(大阪大学グローバルイニシアティブ・センター 招へい研究員)

■発表タイトル 患者と自己の他者化―イタリアで移民とむきあう精神科医と心理士たちの実践

■要旨 移民受入国では、移民を他者とみなすか否かが問われるが、その選択は容易ではない。他者とみなすことは、移民の差別や周縁化を招きかねず、ホスト市民と同一視すれば、移民の文化的変容を強いることに繋がるからである。こうしたなか、精神保健分野では、精神科医・人類

学者のクラインマンらにより、移民の文化的側面である他者性に配慮した精神医療が提唱され、臨床家たちは、移民を他者とみなすようになりつつある。そこで本研究では、近年移民が急増したイタリアで移民とむきあう臨床家らの実践に着目し、移民を他者と見なすことの弊害を彼らがどのように回避しようとしているのかを検討するべく、イタリアの三都市で調査を行った。その結果、イタリアの臨床家らは、移民にも自分自身にも、己の他者性の再評価や発見を促すことで、誰もが捉えがたい他者どうしであるという共通認識の形成を図っていることが明らかになった。他者どうしであるというこの共通認識は、逆説的ではあるが、連帯感を醸成しうるため、移民の差別や周縁化の回避が可能になると考えられる。

#### 第114 回例会 アジア太平洋研究会との共催

- 日時 10月29日(木)(15:10~)
- 場所 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館会議室
- 話題提供者 島蘭洋介(大阪大学グローバルイニシアティブ・センター・教員)
- 話題 イギリスにおけるコロナウイルス感染症と統治性の危機
- ディスカッサント 河村倫哉(大阪大学大学院国際公共政策研究科・教員)

#### 第115 回例会

- 日時 11月5日(木)(16:50~)
- 発表者 平野綾香(大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程3年)
- 発表タイトル ベトナムランソン省チャンディン県ヌン語の頭子音の史的変化と声調の関係
- 要旨 タイ祖語の\*b-, \*d-, \*j-, \*g-, \*ɣ-は現在のタイ諸語の多くで無声音に合流しており、今回調査を行ったヌン語ランソン省チャンディン県方言でもこれらの有声音は無声化している。しかし、特定の環境下でタイ祖語の有声音の痕跡が観察できる。ヌン語チャンディン県方言とPittayaporn (2009)によるタイ祖語の再建形を比較すると、\*b->p-/p<sup>h</sup>-, \*d->t-/t<sup>h</sup>-, \*j->ɬ-/s-, \*g->k-/k<sup>h</sup>-, \*ɣ->k-/k<sup>h</sup>-のように、タイ祖語の\*b-, \*d-, \*j-, \*g-, \*ɣ-にはヌン語の音素が2系列に分岐して対応している。タイ祖語の\*b-, \*d-, \*j-, \*g-, \*ɣ-とヌン語チャンディン県方言の有気音およびs-が対応するのは、タイ祖語の声調\*Bを持つ語である。すなわち、声調が\*B以外の場合は\*b-, \*d-, \*j-, \*g-, \*ɣ-はヌン語チャンディン県方言でp-, t-, ɬ-, k-に合流するが、声調が\*Bの場合はヌン語チャンディン県方言のp-, t-, ɬ-, k-に合流せずにp<sup>h</sup>-, t<sup>h</sup>-, s-, k<sup>h</sup>-になっている。声調\*Bを持つ語では、かつての有声音が無声有気音(\*j-は摩擦音)になっているのである。この現象はヌン語の全ての方言で見られるわけではなく、\*b-, \*d-, \*j-, \*g-, \*ɣ-が声調に関係なく全て一律に無声子音で対応する方言も存在する。この事実は、ヌン語諸方言におけるチャンディン県方言の特異な位置を示す重要な特徴である。

#### 第116 回例会

- 日時 11月12日(木)(16:50~)
- 発表者 岡野翔太(大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程3年)
- 発表タイトル 台湾出身ニューカマー「二世」のライフストーリー——かれらの語りに表れる「台湾」に注目して

■要旨 日本に在留する台湾出身者は、①植民地期に来日し戦後も引き続き日本に在留した人びととその子孫、②戦後中華民国が台湾を接収してから来日した者の二つに分けることが出来る。本報告では、②のなかでも、とくに 1980 年代以降に来日した親を持ついわゆる「二世」を対象とし、彼らのライフストーリーのなかに「台湾」がどのように表れるのかを記述することにある。

1980 年代以降の台湾は民主化が進展し「台湾人意識」が高まったと言われている。本報告の研究協力者のなかでも、自らの親を「中国人」と述べるものはいなかった。それは、親の自己規定や中国大陆と台湾の間の客観的な差異が少なからず影響していると思われる。

では「二世」たちは、日本で育ちつつも、どのように「台湾」の存在を把握してきたのだろうか。日本の中に生きる台湾出身ニューカマーの親を持つ二世は、東アジアの社会的な変化や日本のなかの台湾イメージに良くも悪くも巻き込まれてしまう。かれらにはまず親との繋がりを通して「台湾」を理解し、その後、周りから意識させられる「台湾」の存在があった。それを明らかにするためにも、本報告では「二世」が日本語や中国語あるいは台湾語の習得、日台間の往来を通じた台湾で暮らす親族との関係、日本あるいは台湾の学校という場を経験したことによっていかに「台湾」を解釈してきたのかを検討したい。

#### 第 117 回例会

■日時 11 月 26 日 (木) (16:50~)

■発表者 古谷幸之輔 (大阪大学外国語学部インドネシア語専攻)

■発表タイトル インドネシアにおける村有企業と村落の共同性に関する歴史的考察——ジャワを中心に

■要旨 インドネシアでは村落に関する法律 2014 年 6 号の施行以降、村落レベルへ分配される開発資金が増加し、村有企業と呼ばれる村落部の開発や福祉の向上を目的とした事業体の設置が急拡大している。村有企業に関わる先行研究では、それによる社会的・経済的影響の個別事例に焦点を当てた分析が多く行われてきた。しかし、村有企業を通じて志向される開発のあり方に村落に対する過去の政策や開発プロジェクトの影響が認められる一方で、村有企業の拡大を可能とした歴史的要因については十分に触れられてこなかった。参加型開発に力点を置く 2014 年村落法は、村落を法共同体と定義し、村有企業は相互扶助や家族主義の精神により営まれるものと規定しているが、ジャワの村落(デサ)についてはそれを共同体としてとらえるべきか否かということ自体が長く議論されてきた。本発表では、村落の共同性に着目したうえで、村有企業の急速な増加という今日のインドネシアで起こっている事象を通時的かつ俯瞰的な視点で捉えなおし、それを可能としている歴史的背景について検討したい。

#### 第 118 回例会

■日時 12 月 3 日 (木) (16:50~)

■発表者 平良理子 (大阪大学文学部人文学科音楽学・演劇学専修 4 年)

■発表タイトル 卒業論文「ジョグジャカルタ王宮の鼓笛隊の起源と形態」について

■要旨 本発表は執筆中の卒業論文「ジョグジャカルタ王宮の鼓笛隊の起源と形態」についての報告である。本研究は、「粗野 kasar」に対置される「洗練 alus」された「ジャワ文化」の模範的中心と位置づけられてきたジョグジャカルタ王宮(ジャワ島中部地域)が西洋のコロニアルな軍楽隊(ブラスバンド)の影響が強く見られる鼓笛隊をその文化実践としていかにして内包し得たのか、という問いに対して、現在見られるような鼓笛隊の姿を成立させた歴史的条件(=「起源」とその音楽やパフォーマンスの実態(=「形態」)の考察から仮説を提示することを目的とした音楽学的・地域研究的研究である。本発表では、発表者の問題意識を明らかにした上で、論文

の構成に沿ってその内容を報告する。

## 第119 回例会

■日時 12月10日(木)(16:50~)

■発表者 Lakuntsova Elizaveta Evgenyevna (大阪大学大学院言語文化研究科言語社会専攻博士前期課程)

■発表タイトル 貿易及び投資における日露企業間取引の阻害要因

■要旨 ロシア及び日本は隣国であることにも関わらず、ビジネスにおいて、中国や米国などの日本のビジネスパートナーに比較すると、今までの交流がかなり低かった。この問題の原因の中には、領土問題、国際政策を巡る抵触といった様々な原因がある。ビジネス取引の際、潜在的なパートナーとの関係を深化するためには、相手の言語のみならず、会社制度、ビジネス文化、取引の際の習慣などを検討することが重要である。そのため、本研究では政治的な原因ではなく、貿易及び投資における両国間のビジネス事情、日本とロシアにおける「会社」という概念、効果的な取引に影響が与えられる制度的な特徴及び言語的・文化的な特徴に焦点を絞る。

## 第120 回例会

■日時 12月17日(木)(16:50~)

■発表者 登利谷 正人 (日本学術振興会特別研究員PD (大阪大学大学院言語文化研究科))

■発表タイトル アフガニスタンにおける言語政策の変遷とパシュトー語言論空間の交流

■要旨 アフガニスタンではパシュトー語、およびダリー語(ペルシア語のアフガニスタン方言)の二言語が国家公用語として規定されている。元々、歴史的に文語・文化語として機能してきたペルシア語から、1930年代から本格化した国民統合政策の一環として、支配エスニシティ集団であるパシュトゥーン言語、パシュトー語への転換と地位向上を図るためさまざまな政策が実施された。本報告では、20世紀以降の言語政策の変遷を政治動態と合わせて確認した上で、パシュトー語が文語として機能する上で重要な標準語設定と正書法確立の問題について概観する。さらに、「パシュトー語圏」をアフガニスタンと二分するパキスタンのパシュトゥーン文人との交流についてもパキスタンのパシュトゥーン文人の記録から分析する。

## 第121 回例会

■日時 12月24日(木)(16:50~)

■発表者 永島 朱華 (大阪大学外国語学部インドネシア語専攻3年)

■発表タイトル インドネシア現代美術におけるアート・コレクティブ ルアン・ルパ成功の背景

■要旨 本発表は、発表者の執筆計画中の卒業論文についての報告である。「アート・コレクティブ」とは、近年世界的によく聞かれるようになった美術用語である。簡単に言えば、アーティスト集団のことであるが、その集団のメンバーは、積極的にパブリックと関わり、社会と密接につながったアートの実践を行っている。インドネシアでは、芸術や文化の制度的インフラが不十分であるという状況下でアートを続けるための必然的選択として、コレクティブでの活動が活発に行われている。しかしながら、コレクティブとして長く生き残ることは困難であり、大半のコレクティブは規模、資金面から解散するが多い。そうした状況で、ジャカルタ発のアートコレクティブ「ルアンルパ」は、世界最大規模の国際美術展、ドクメンタ2022の芸術監督として選ばれた。これは、アジア初・アートコレクティブ初の快挙である。本研究では、コレクティブとし

て発展するため必要な要素は何かという問いを明らかにするため、ジャカルタやインドネシア全体の社会情勢と照らし合わせて、結成当初の 2000 年から、ルアンルパの活動を分析する。

## 第 122 回例会

■日時 1 月 14 日 (木) (16:50~)

■発表者 藤村 瞳 (上智大学大学院グローバルスタディーズ研究科特別研究員)

■発表タイトル 20 世紀初頭におけるキリスト教信徒組織の拡大とビルマのバプテスト牧師の関わり——白人至上主義に対する教育エリートの理解

■要旨 本発表では、20 世紀初めのプロテスタント諸派による超教派的な世界伝道の動きとビルマのバプテスト牧師の関与について考察する。1880 年代から 1910 年代までの間、大西洋の両対岸でキリスト教徒若年層を主体とした信徒組織が相次いで組織され、国際的な活動が顕著になった。この世界伝道の動きは英領インドにも到達し、ビルマのバプテスト信徒もビルマ代表団として世界宣教会議へ参加した。キリスト教信徒組織の世界的拡大については、従来の司牧者や教会組織ではなく学生・青年層を中心に展開しプロテスタント諸派の間で超教派的な連帯を広げた点以外に、その内実は依然として白人中心的であったことが指摘されている。では、そうした実態について、諸種の活動に関与していたアジアの信徒はいかに理解したのか。本発表ではまず、ビルマのバプテスト牧師の記録から、世界会議への参加をつうじて白人至上主義的な様子を目の当たりにしたことを示す。そして、それを否定的に評価する一方で、英語に長けた教育エリートである自己を肯定する手段として前向きに捉えようとした彼らの理解の二面性について考察する。